極楽寺だより

2016（平成28）年11月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）　〒759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

秋の永代経法要のご案内

次の通りお勤めいたしますので、お誘いあわせの上、お参り下さいますよう、ご案内いたします。

十一月十四日（月）
昼 一時半 夜 七時半

十一月十五日（火）
昼 一時半

講師 大阪 如来寺住職
釈 徹宗 師

TV出演も、多数！各方面でご活躍の釈先生が、再び極楽寺に来て下さいます！！

昼間お仕事の方は、ぜひ夜席にお参り下さい。

永代経法要とは

住職が子どもの頃は、山を走り回って遊んでいました。しかし、今は大人でもなかなか入ることができません。なぜなら、山に入る人がいなくなったことで、道がなくなってしまったからです。先に行く人が踏みしめる歩みによって、道はできるのです。私たちのところにまで、お念仏の教えが伝わってきたのも、先だってこの道を歩まれたご先祖があるから、志を納めお寺を護ってこられた先輩方があるからなのです。そして次に歩む者がなければ、道は途絶えてしまいます。永代経法要とは、永代にわたり伝えられたこのみ教えを感謝と共にいただき、永代にわたり伝えていこうという尊い営みなのです。

ご予定下さい

◇12月18日14時　仏婦報恩講
◇12月31日夜23時45分　除夜の鐘撞き
◇ 1月　1日10時　元旦会
◇ 1月14～16日　御正忌報恩講

お取越しの季節です

お寺にご連絡下さい。
日程を調整した上で、
お参りにうかがいます。

「お取越し」とは、真宗寺院において最も大切な行事である親鸞聖人のご法事「報恩講」を、ご命日よりも取越して（早めて）各家々で勤めるという、真宗門徒にとって大切な伝統行事です。ところが近頃は、「どうして親戚でもない人の法事を、勤めなくてはならないのか！」と怒られそうな時代になりました。しかし、親鸞聖人が亡くなられてから約七百五十年。長い歴史を通して「伝えなくてはならない心がある」と、私たちのご先祖や先輩方が「お取越し」という行事を、私たちのところにまで届けて下さっているのです。

お取り越しを
お勤めしましょう
キャンペーン

矛盾（むじゅん）を抱（かか）えるからこそ

近頃は、「人に迷惑をかける」ことを怖れたり、「かけられる」ことに怒りさえ感じる人が増えているようです。「迷惑をかけるような私は、生きる資格がない」という人や、「迷惑をかけるヤツは死んだ方がいい」という人もいるのだとか。

でも、よくよく考えてみれば、人に迷惑をかけずに生きている人なんて、この世の中にいないでしょう。みんな人に迷惑をかけて、心配をかけて、許されて、ここまで育てられてきたわけです。「お金を払っているのだから、迷惑をかけていない」という方もあるようですが、それは薄っぺらなものの見方です。本当に世の中がお金や損得だけで動いているのであれば、もっとシビアでギスギスしているはず。自分が払った金額に見合うだけのものしか得られないというのは、残酷ですよ。実は、お金とはまったく違う価値観で支えて下さる方があるからこそ、この世の中が成り立っているのです。長いいのちの歴史があるからこそ、今私たちはここにいるのです。私たちは、様々なものをいただいて生かされているのだということを、自覚しなければなりません。

しかし、「迷惑をかけなくては、生きていけない」からと、開き直り、感謝することもなく、ふんぞりかえった生き方もどうかと思います。「迷惑をかけてはいけない」ということと、「迷惑をかけなくては、生きていけない」という、一見矛盾することを同時に抱える中で、感謝したり、反省したりということがあるからこそ、人生に深まりが生まれ、味わいも生まれてくるのではな

いでしょうか。

以前、テレビで『ほこ×たて』というバラエティー番組がありました。やらせ問題で打ち切りになりましたが、とても面白く見ていました。番組タイトルは、「矛盾」という言葉からとったもの。ある商人が、「うちの矛は、どんな盾でも突き通すすごい商品だ」と言いながら、同時に「うちの盾は、どんな矛でも防ぐ、すごい商品だ」と売り出していたところ、お客さんから「では、その矛でその盾を突いてみろ。」と指摘されたという中国の故事から、辻褄が合わない、道理が合わないことを、ホコとタテで「矛盾」というのは、皆さんご存じのことでしょう。

番組では、「絶対に穴の開かない金属ＶＳどんな金属にも穴を開けられるドリルの対決」や「絶対に開かない金庫ＶＳ最強の金庫開け職人」といった、まさに最強の矛と最強の盾の対決が行われます。対決ですから、当然勝ち負けがはっきりしますが、負けた側が悔しがり、研究し、リベンジを申し込みます。申し込まれた側も、さらに研究し、負けないようにと取り組んでいく。相反する二つのものが向き合うからこそ、お互いが磨かれ、深まり、成長していくことがあるのだと、番組を通して教えられました。

同じように、「迷惑をかけてはいけない」と「かけずには生きられない」という、相反するもの、矛盾するものを抱えていると、片方に偏ると「それで大丈夫か」と反対側から問われ、反対側に偏ると「それでいいのか」とまた問われていく。すると考え方や見方が、どんどん深まり、磨かれ、耕されていくのです。

問われなければ、深まりません。偏って決めつけたら、薄っぺらなままそこで終わりです。実は、親鸞聖人という方は、まさしく相反する二つの間を、行ったりきたりする中で、人生を深く見つめられた方でした。「この私を、必ず救うと誓われた阿弥陀如来がおられる」ことと、「決して救われようのない身である」という、相反し、矛盾することを受け止めることで、両方から問われ、深められたのです。罪深いと自虐的にならない。救いの中に寝転がらない。開き直らない。常に、常に、揺り動かされ、問われていく。だからこそ、親鸞聖人の生き方は深くて重いのでしょう。

（次ページに続く）

舞台演出家の鴻上尚史さんが、『戦力外捜査官』（出演　武井咲　EXILE・TAKAHIRO）という作品で、初めて連続テレビドラマの脚本を書かれたときのこと。土曜日の9時放送ということで、子どもたちも見るからと、できるだけわかりやすい演出を求められたそうです。鴻上さんは「人生の中では、悲劇の中にも笑いはあるし、喜劇の中にも悲しみはある」という思いで、悲しい話の中にも笑いの要素を入れ、楽しい話の中にも悲しみの要素を入れられました。確かに、人生ってそんなものですよね。悲しみと喜びという矛盾した感情が、渾然一体となって分けることはできません。

ところが、「これは悲劇か喜劇かわからない。鴻上尚史は迷走している。」といった意見が寄せられる。少し複雑な演出をすると、良くない反応がほとんど。鴻上さんは、「今の人たちは、1か0のように、頭がデジタル化している。複雑さを受け止められない。」と指摘しておられました。

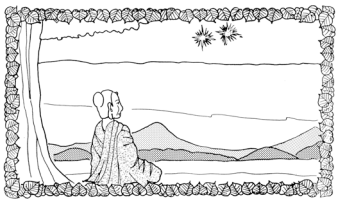
人生は、単純なものではなく、薄っぺらいものではない。複雑だからこそ豊かであり、矛盾を抱えるからこそ深まるのです。このような時代だからこそ、親鸞聖人の生き方を通して学ばなくてはならないことがあるようです。■

作法一口メモ

問い：お仏壇、向かって右側の方は?

答え：親鸞聖人です。

親鸞聖人は、1173年に京都でお生まれになられました。9歳で比叡山に入り修行されましたが、煩悩をのぞくことができない自分の愚かさに悩まれる中、法然上人のもとでお念仏の道に入られました。親鸞聖人の歩みは、人間の弱さ、愚かさ、悲しさ、切なさを丸ごと受け止めて下さる阿弥陀さまと共にありました。すべての生きとし生けるものを、阿弥陀さまから願われている仲間（御同朋）と尊ばれたその歩みは、長い歴史を通して、私の人生を照らし出す灯として、今もなお進むべき道を指し示して下さっています。



極楽寺掲示伝道
けいじでんどう

11月の言葉

何だかんだで、忙しい日々を送っています。いや、本当に忙しいのでしょうか。ただ気忙しいだけなのかもしれません。

そんな私の生き方を、言い当てられるような言葉と出遇いました。『大無量寿経』に「然るに世人、薄俗にして、共に不急の事を争う」とあるのです。「世人」とは、世の中に生きる私たちという意味です。「薄俗」とは、薄っぺらなこと。そして「不急の事」とは、急がなくても良い事という意味だそうです。つまり、この世に生きる私たちは、急がなくても良い事を我先に争いながら、気がつけば、飛び上がって喜ぶことも、涙を流して悲しむことも、心を震わせて感動することもなく、ただ薄っぺらに生きていると言われているのです。

私は、この言葉に出遇ったとき、ドキッとしました。二千年以上も前に書かれたお経に、現代社会に生きる私の姿をズバリ言い当てたような言葉が書かれているのですから。

考えてみれば、私たちは何を求め、何に急いで生きているのでしょう。様々な欲望が刺激される世の中で、本当に求めるべきものを見失いながら生きているのかもしれません。

「忙」という漢字は、立心偏に「亡」、つまり「心を亡くす」と書きます。「亡」という字の下に「心」をつけると「忘」という字になります。私たちは、心を亡くし、大切なことを忘れながら生きているのかもしれません。立ち止まり、自分の人生において本当に求めるべきものは何なのかを見つめ直して欲しい。阿弥陀様は、そう私たちに呼びかけ続けておられるのです。■

10月の言葉

われわれは知らなくても
仏に願いを
かけられ
望みをかけられている

極楽寺掲示伝道　曽我量深

東日本大震災が起きて、今年で5年目を迎えました。そんな中、今度は熊本で大変な地震が起きました。東北でも熊本でも、今なお大変なご苦労をされている方が多いと聞きます。忘れることなく、できることをさせていただきたいと、思うことです。

さて、二〇〇四年には新潟県中越地方でも大きな地震があり、やはりたくさんの方が大変なご苦労をされました。その時、当時二歳の男の子が、レスキュー隊員の方々の命がけの救助により、地震発生から九十二時間後、奇跡的に救出されたということがありました。助けられた彼は、今十六歳になっているのでしょうか。

私は彼に、助けられたいのちであるということを忘れないでいて欲しいと思うのです。そんなことを言うと最近は、恩着せがましいとか、負担だと思われる場合があります。でも、僕はそんなことを言っているわけではありません。借りができたとかいうようなレベルの話でもないのです。彼がこれから生きていく中で、挫折することや、失敗することがあるかもしれない。時には、つまらない生き方をしていると自分を↘恥ずかしく思うこともあるかもしれません。でも彼は、どれだけ挫折しても、どれほど自分が嫌いになっても、自分のいのちまで粗末に扱ってはならないのです。なぜなら、たくさんの思いが、彼を助けたのです。たくさんの願いが彼のいのちを支えたのです。助けられたこのいのちは、自分一人のいのちではないのです。だから彼は、自分自身を蔑み、傷つけることはしてはならないのです。

考えてみれば、それは彼だけの話ではありません。私たちみんな、それぞれに願いをかけられているのです。私が知らなくても、親から、周りの人たちから、そして阿弥陀様から。親鸞聖人は御和讃に

「南無阿弥陀仏をとなふれば　十方無量の諸仏は
百重千重囲繞して　よろこびまもりたまふなり」

と歌われています。南無阿弥陀仏を称え、お念仏に込められた心を味わう時に、無量の仏様が、私を百重にも千重にも囲んで、護り、支えて下さっている事実に気づかされていくのだと。

私がしていることは、どんなに愚かでお粗末であっても、私のいのちそのものには、願いがかけられ、護られ、支えられているものであったのです。私が知ろうが知るまいが、阿弥陀様から願いがかけられているいのちだったのです。だから、自分を蔑んではいけない。そして、共に願われている仲間を、蔑んではならないのだと教えられるのです。深く味わいたいものです。■

9月の言葉

自分の都合で亡き人をタタリにしているこの私

極楽寺掲示伝道

あるお寺に、日頃お参りされることのないご門徒の男性が、突然訪ねてこられたそうです。用件は、「神さんに見てもらったら、水子供養のためにお寺へ行って三部経を読んでもらえと言われましたので」ということでした。

よくよく事情を尋ねると、十二、三年も前のこと。訳あって、子どもを生むことができなかった。中絶をした。ところが、最近健康がどうもすぐれない。そこで、神さんに見てもらったと言われるのです。

ご住職は、「浄土真宗では、そんな気休めのお経は読みません。共に目覚める方向へ歩ませていただくようにと、教えを聞くことが大切なのです」と、一旦は断わられました。しかしここで断ると、この人はまた他の寺へ行って気休めのお勤めをしてもらって、それで済まされるだろう。ならば、せっかくの仏縁を生かそうと思い直し『阿弥陀経』一巻を丁寧に読まれました。↘

お勤めが終わり、ご住職は尋ねられます。

「読経中、何を考えながらお参りしておられましたか？

① 今あの子が無事でいたなら何歳になっていただろうか・・・、かわいそうなことをしたな・・・か。

② あるいはこれで水子も浮かばれて、私の病気もなおるだろう。やれやれ、か。どちらですか？」

その方、しばらく黙り込んだ後、「後の方です。健康がすぐれないので見てもらったら、水子の供養をせよと言われたもので・・・。」と告白されました。

ご住職はこう言われたそうです。

「あなたは、水子のためと言われたが、本心は自分のため、我が病気のために亡き子どもさんをダシにしていたのではないですか。その時は、ご事情があったにせよ自分の都合で中絶し、今はまた自分の都合で我が子をダシに使おうとしている。それが、今のあなたの姿ではありませんか。ならば、気ままで、勝手この上ない自己中心の営みを、あなた自身が重ねるだけです。そしてその罪業は、お経で帳消しにはなりませんよ。お経はむしろ、その罪の深さを教えるご説法なのですから。」

「では、どうしたらよろしいのですか。」

（次ページへ続く）

極楽寺だより
2016(平成28)年11月号

「煩悩の心で生きている私達は皆、罪業の持ち主なのです。あなただけではありません。その罪の自覚の上に、仏の教えに救われなければならないのです。そして自分が救われた時、初めて子どもさんも救われるのです。

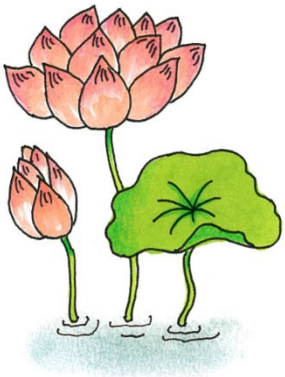
今日、お寺の門を入る時は『水子のせいで』と思ってこられたでしょうが、この話を本当にわかって下さるなら、門を出て帰られる時は『あの子のお陰で、大切なことに気づかせてもらった』と受け取られるでしょう。

そういうご縁をいただいたという目覚めを通して初めて、生まれることができなかったお子さんは、私を導いて下さる仏様であったといただく世界が開かれるのではないでしょうか。」とお話をされたそうです。

それ以来、その男性の方は、お寺に聴聞に参られるようになられたということです。

私たちは、自分の都合にあわせて、物事を判断します。時には、亡き人をタタるものとして扱うことも。しかし、それではどこまで行っても、自分の都合というものに振り回される生き方でしかなく、迷いを深めるばかり。真実のあり方に目覚めることはできません。

仏法とは、自分に都合の良い人生を実現させるものではなく、その罪深さを教え、私を目覚める方向へと歩ませて下さるはたらきなのです。仏法をいただき、目覚めを通した時に、亡き人を仏様と仰いでいく生き方が開かれるのだと教えられるのです。■



極楽寺ホームページ　こつこつ更新中

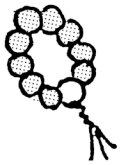
極楽寺.com で、検索して下さい。

極楽寺だよりを送りませんか

都会に出ておられる子どもさん、お孫さんたちへ。有縁の方々へ。お寺へお申し出下さい。直接郵送します。送り先が増えると、住職はうれしいのです。

お寺まで、お持ち下さい。

お念珠
修理いたします



❏ 本当に、広島カープが優勝してしまいました。ファン歴 42 年の住職ですが、今年の優勝は本当に特別なものがありました。（日本シリーズにも、出場が決定！）❏ カープを通して私は、「人生は、思い通りにならない」ということを教えられてきました（何と、仏教的でしょうか！）。ところが近頃は、「思い通りになる」ことが基準になっているようです。だから「ならなかった」時には不満とクレームしか出てこないのでしょう。「ならない」ことが基準の場合は、「なった」ことは恵みであり、感動と感謝でいっぱいです。日々の生き方も、そうでありたいもの。カープを通して、とても大切なことを教えられています。■